

海軍

甲種予科練習生

特攻の生き残り

広島県 重政 幸雄

―重政さんは海軍志願で航空隊の生き残りということですが、先ず予科練の話から伺いましょう。

私は大正十四年一月十九日生れ、甲種飛行予科練習生の第十期生です。昭和十六年に受験したのですが、資格は旧制中学四年程度の学歴者というので、五年在学中に受験したのです。

第一次、第二次と試験があり、体格で半分以上落ち、学科試験、身元調査です。十七年二月には岩国航空隊

で適性検査があったのですが、一週間ぐらいの間毎日、落ちて帰させる。二〜三週間後に採用通知が来ました。

合格は百人中二、三人でした。当時我々は金の卵といわれ、飛行機が当時の金で十五万円ぐらいだと聞いていましたが、その時代は飛行機より人間の方が大切とされていたのです。第一次試験は自費(体格・学科)で、その後の旅費は支給されました。役場から通知が三月三十日に来て四月一日入隊しました。家庭は両親健在、教員だった兄(十九年十一月病没)がおり、私は次男でした。

当時、予科練の服装は水兵服でしたが、途中から七ツボタンになった。海軍の階級は四、三、二、一等飛行兵、兵長、二、一等飛行兵曹と進むのです。訓練は一般学科として数学、国語などで、それから飛行兵と

しての通信、航法、軍用手旗などです。年齢は十六、十七歳で、海軍兵学校より進級が早いというので予科練に入った者もいた。

訓練は文字通りの「月火水木金」でした。前ささえ（腕立て伏せ）、ピンタ、軍人精神注入棒（極の木の太めなもの）で、それが折れるぐらい殴られる。「総員制裁十本」とか十五本とかで、尻が最初ははれ、黒くなり、蝟になる。それに耐えられなくなって、鉄道線路で手をとばした人もあった。飛行機に乗って「しもうた」では遅いから訓練も厳しく、体で覚えさせるためか、分隊長も黙認していた。

私たちも半年ぐらいで馴れた。何でも罰則で、早喰い、競技に負けたり、団体行動、一万メートル競争、短艇、手旗、水泳と負ければ罰だ。泳げない者は底に貼り着いてもやらせるし、団体で一人でも落後すれば総員罰則です。

一般や軍事教育も④の教科書で、魚雷、飛行機、エンジン性能……。信号は発光、モールスもやるし、受信百二十字、送信九十字（一分間）ぐらいになる。訓練

↓テスト、あらゆるものを一通り正式訓練を受けた。

八、九月は横須賀で、艦務実習は戦艦「山城」で十日間ぐらいやった。同期生は千人以上いた。最初の本土空襲のとき、初めてバツタを喰った。艦務実習中の行軍は東京―筑波山で、陸戦銃（三八式銃や口径七・七ミリの九八式軽機関銃）を各自持って、防毒面も携行した。私の次の十一期生は戦艦「陸奥」で実習中瀬戸内海柱島で爆発し、五百人以上ほとんど死んだといえます。私はたしか土浦にいた時でした。

次に後期の訓練です。操縦と偵察とあるが、その適性検査では手相、人相見が来て総合して決める。赤トンボという九七式練習機でも適性を見る。地上訓練は訓練室で行う。爆撃、編流、風速、風向など。

操縦の人はグライダーだが、私は偵察となり通信、信号などと、二人で乗って航法、通信、連絡方法、索敵など実地に訓練する。飛行機の照準器は当時二万五千円したという。飛行訓練生になり、水兵服から歌にあるセツボタン服になった。

私は飛行練習生第三十二期で、半年後静岡県大井航

空隊（茶畑の中）で一ヵ月訓練、十八年五月上海航空隊へ移動することになり佐世保から特務艦「室戸」に乗り、一晩で上海に着いた。後期には青島へ行き、飛練三十三期生になったのです。現地は飛行場設営中だったが、一キロ爆弾で爆撃訓練、射撃は吹き流しを、航法はジャングルを使った。その間、移動訓練では前にいったように上海から青島航空隊へ移動したが、練習機を実用機にして使った。

十八年十二月二十四日、飛行練習生を卒業したので。訓練中の資料をいま持って来ましたので復習を試みます。

通称「甲飛」とは、甲種子科練習生のことで、中学四年第一学期終業者以上の学歴、第十期生は昭和十七年四月一日入隊、千九十七名、戦没者七十七名、現在の生存者二百名。第九期生八四一名入隊、戦没六百三十名。第十四期生五万二千百十五名、戦没（空襲など）六百十八名。

採用通知 各鎮守府↓役場↓本人

教育 1 精神教育、重点(国のため死ぬ) 2 勤

務(日常作業、諸教練、甲板掃除…死ぬほど) 3 体育

学術 1 運用術 2 航海術 3 砲術 4 水雷術
5 通信(無線) 6 航空術 7 機械術 8 生理術
生 9 軍制及諸法規 10 数学、幾何・三角 11 現
代学 12 艦務実習

十八年六月艦務実習一週間、横須賀戦艦「山城」一週間、七月十七日予科練卒業、飛行練習生となり大井航空隊、三十二期生上海、三十三期生一部青島、十二月二十四日飛練卒業し希望通り呉航空隊勤務を命ぜられ、上海から「吉林丸」の一等船室で呉に帰った。(同期生六十七名)

一十九年になってから、いよいよ実戦ですか。

一月七日までは呉で訓練ですが、洋上ではなく基地勤務となる。フロート付飛行機を艦に載せなくなつて、カタパルトの訓練をした。米本土砲撃に行った者もいたが、主として柱島泊地での合同訓練でした。

十九年一月八日、大分の佐伯航空隊、艦隊は佐伯に集結していた。そこで電探(磁気・電波)を取り付け、

教育、指導を受け、実際の操作をした。第六期特別練習生は実戦をしながら（飛行機に積んだのはこれが初めて）、訓練中も二百五十キロ爆弾を積んでいて、潜水艦を見つければ投下する。爆撃訓練は廃艦に対し二、三千メートル上空から実施したり、航法は百五十マイルぐらい、佐世保から飛んだ。

実戦で、艦隊の前路上空を直衛、対潜哨戒をして種子島ぐらゐまで行き、沖縄基地の隊と交替する。艦隊は沖を、輸送船は沿岸を航行する。駆潜艇は佐伯基地にあるし、航空隊は陸上と海上とにあった。

十九年六月、第九五三航空隊勤務となる（ダバオの戦況が変わり）佐世保→ダバオは台湾止まりとなった。一部はレイテ、タクロパンの哨戒、索敵、対潜をしていて全滅した。私たちは佐世保や大村などの空輸準備を、呉の第十一航空廠でやっていました。

六月十二日、編隊を組んで佐世保発、台湾の高雄の南の東港に補給に降り、そこで勤務をすることになった。関東軍等も（大陸と台湾勤務の間から）フィリピンへ行ったり、アパリ（ルソン島北部）へ行つた者は

皆戦死した。潜水艦に艦船がやられるのを護衛したりする間に、対潜特別攻撃の教育を実施した。またサイゴン、馬來へ移動哨戒したり、フィリピンへ着くまで船団護衛したが、米軍のレイテ上陸以後は、フィリピンの飛行機（第四航空軍）は飛べなくなってしまった。

前にもいいましたとおり、実戦は十九年一月呉からです。比島のタクロパンは水上機で、哨戒部隊は引き揚げた。飛行艇や水上機は毎日二機ぐらい未帰還があった。私たち哨戒隊は、夜中索敵に四、五機で出たが、空戦は比較的少なかった。台湾の尖端から出て、角度十五度、百五十マイルぐらい扇型の地域を索敵する。そのうち犠牲が多くなって、搭乗割が出来なくなった。索敵はリーダーに引つかからぬよう海面ストレスに水しぶきがかぶるように飛ぶ。

台湾沖の海戦の時は、第九〇一航空隊の飛行艇が発見したが、台湾上陸せずと判つたが攻撃した。特攻も戦果はあがらなかった。

第一神風攻撃隊、敷島隊で、中野磐雄など七人程の同期生が軍神になっています。特攻隊は艦船に近づく

までにはほとんどやられる。敵の飛行機は夜間戦闘機が上がついて、レーダーで特攻機を捕まえるので、機動部隊にたどり着くまでにやられてしまう。何しろ雨霰のような弾幕の中を突っ込むのだから、レイテ戦（米軍のレイテ上陸、レイテは比島戦の天王山といわれていた）以降は総員特攻だった。

飛行機はほとんどやられて少なくなるし補給も少ない。基地は空襲、空襲で不眠不休だから整備が間に合わない。もうその頃はゼロ戦に爆弾を積む、護衛戦闘機と両方あるのだが、山本連合艦隊司令長官が搭乗していて撃墜された一式陸攻機もあった。

台湾沖の海空戦は四日間ぐらいだったが、報道のよくな戦果は実際には上がらなかった。鹿屋、指宿、博多、四国から随分特攻に出たが、大部死にました。私が出撃したが偵察で索敵範囲外だったので判らない。輸送船、二十隻に駆逐艦が護衛して行ったが随分やられるので、対潜攻撃やった時、十六隻沈めたといつて我々の航空隊は感謝状を貰った。

フィリピンも沖縄も台湾も、だんだん追いつめら

れたわけですが、航空隊はどうしていたのですか。

台湾の飛行場は機能しなくなつた。淡水には何機か残っていたが、直ぐ空襲されてやられてしまったので、隊は台湾を引き揚げることになり、基隆から上海まで輸送船に乗り竜華へ行った。竜華は数日で全滅した。

三月二日、戦闘機はほとんど特攻に出ていったが、整備は不充分、連日の空襲や整備作業で整備兵も不眠不休、疲労で皆やられてしまう。

四月五日、博多に南方から上海を中継して内地へ、搭乗員だけは多数集結したが飛行機は無かった。

六月五日、我々隊員は民宿して任務に付いた。水上飛行機も一トン爆弾を爆装して訓練もした。山口県の大浦（海兵の休息地に近い所）で沢山死んだり、羅津、ウラジオ、日本海の護衛、下関、釜山間の海峡、七尾、舞鶴等から対潜、哨戒と攻撃をしていた。不時着してシベリヤへ抑留された者もいる。

大浦から特攻隊を出さねばということになり、第十一航空廠（呉）では実際には水上飛行機を製造もしていた。その間、ブイに繫留している水上機がグラマン

機に攻撃されたりしてしまった。私は八月十二日まで大浦勤務でありました。

特別休暇をもらったが私は第二次だった。ところが第一次に帰った者は岩国で米軍機の爆撃を受けた。私たちは特攻をするため十二日博多集合、その間に沖繩へ索敵攻撃をした。

十四日に飛んだが、誰かが行かねばならないので、私も「胸が晴れた思いで死んでも良い」と思った。

その後、飛んだら九州の西海岸の灯火管制が無くなっておかしいと思った。敵もいなかった。それまでは敵がいつも何機かいて、こちらは何機かで撃ち合ったのだが。

朝鮮にいた者は八月二十四日、五日に釜山から下関へ渡らせた。終戦後は一週間残務整理をして、私物や書類の整理をした。我々は飛行服は持って、「無期休暇と無賃乗車券」をもらった。休暇は基地司令官の命令で、「若し連絡があれば集まれ」ということだった。当時は命令や、情報が錯綜していたと思う。

帰宅したら母は病弱で休んでいたが、「もう何処へ

も行くな」といわれたので、日本航空からの誘いを断わって、百姓をやったり親戚の織維会社へ二十年程勤めていた。その後独立したが、飛行機乗りの時、肋骨を折った所が、帰ってから化膿した。

先程申したとおり、甲種予科練十期の同期生の七割以上が戦死し、現在生存者二百名の中に私も入っていることを見れば、自分の幸せと、戦没者や御遺族のことを深く心に刻んだ毎日です。

海軍航空隊 軍隊当時の思い出

大阪府 中江 清則

―中江さんは、海軍へ志願されたというが、何か動機があったのですか、生まれは大正何年でしたか。

私は大正十四年二月四日生まれで、海軍を志願した動機は従兄との再会にあります。

従兄の板倉光馬氏は、昭和八年、海軍兵学校六十一期生として卒業して、大尉で潜水艦「イ号四十一」の